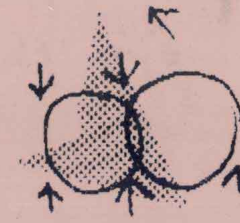
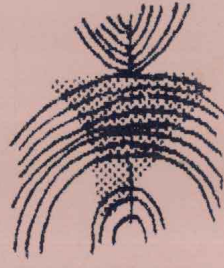
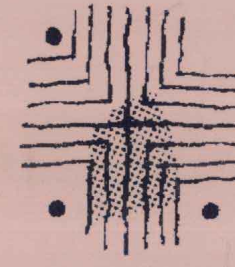
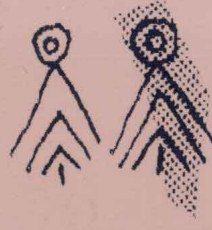
藪医者のほんね

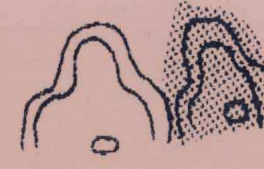
森田 功











藪医者のほんね

森田 功

毎日新聞社

著者紹介

森田　功（もりた いさお）

1926年三重県に生れる。
広島高等学校卒業。
三重大学医学部卒業
元順天堂大学医学部講師。
医学博士。
著書に『輝く波形』毎日新聞社。
『やぶ医者の言い分』平凡社。
『藪医者のつぶやき』毎日新聞社。
『やぶ医者のねがい』毎日新聞社。
『やぶ医者のなみだ』毎日新聞社。

藪医者（やぶいしゃ）のほんね

一九八六年二月五日　第一刷
一九九三年七月二〇日　第五刷

著者　森田　功
編集人　吉田俊平
発行人　田中正延
発行所　毎日新聞社
〒一〇〇-五一　東京都千代田区一ッ橋
〒五五〇-五一　大阪市北区梅田
〒八〇三　北九州市小倉北区紺屋町
〒四五〇　名古屋市中村区名駅

印刷　中央精版
製本　大口製本

落丁・乱丁本は小社でおとりかえします。

© Isao Morita *Printed in Japan* 1986

ISBN4-620-30699-1

藪医者のほんね　目次

手洗い（守秘義務）　7
日にち薬（抗生剤）　17
霊柩車に乗る（癌）　26
元祖（鍼）　37
桑畑（心疾患）　47
ないしょの過去（医療問題）　57
鏡の中（湿疹）　66
目隠し（医薬）　76
月下美人（美容器）　86
お経と線香（血圧）　96
まぐれ当り（不定愁訴）　106

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

天気予報（診断）　116
かえ玉（診断書）　127
玄関にて（医療問題）　137
年賀状（難病）　146
役得（脱水症）　155
南極の石（医療問題）　165
日干しの猿（標準体重）　176
光と影（開頭手術）　186
遠来の客（高血圧の手術）　197
渋滞（気管支喘息）　207
あとがき　217

裝幀・德永勝哉

藪医者のほんね

手洗い（守秘義務）

傾き始めた冬の日が、軽自動車の後ろ窓いっぱいに差しこんで、車内はジャンパーを脱ぎたいほどの暖かさになった。そのうえ、今朝は故障していたヒーターが何かのはずみで治ったらしく、音をたててまわり始めた。

私は急いでヒーターのスイッチを切り、窓ガラスを下げた。流れこむ冷たい風が心地よい。

先月、隣の市に引っ越した老人から、往診を依頼された。私は、遠い道のりを思うと気がすすまなかったが、引き受けた。越した後まで頼られるのが嬉しくもあり、それまで長い間診ていた責任を感じたからである。

午後は、ほかに往診もなく、四キロ近い往路にはドライブに似た解放感があった。幸い老人の病状には格別の心配がなくて、世間話をして励ます程度ですんだので、帰り道はさらに気分が軽かった。

道の左側は航空技研の塀が続いている。右側には、一列に丸く苅りこんだ茶の木が並び、その先は畑が連なっている。先さがりに傾斜した畑面（はたづら）には、とり遺されたキャベツがいくつか立ち枯れているばかりである。

ようやく車が通れるほどの道幅なので、通過する車はほとんどなく、人影もない。霜枯れた情景は、

東京都下の市内というのが嘘のようである。そういえば私の診療所のある辺りも、二十年前に団地ができるのと前後して私が開業するまでは、一面の畑と雑木林ばかりであった。

航空技研の閉じたままの裏門の前に、車一台を停められる空き地を見つけて、私は車を入れた。エンジンをとめながら、道の向う側に並んだ茶の列の切れめを探した。私は立ち小便がしたかったのである。

立ち小便がいけないことはわかっているが、もう我慢がならないのだ。診療所まではまだかなりの距離があり、途中に公衆便所などはない。

道端のガソリンスタンドで急な用だと頼めば、トイレを貸してくれる。ここに来るまでにもガソリンスタンドはあった。しかしスタンドの構内に車を乗り入れて行って、「いらっしゃい」と駆け寄る店員に、「小便をさせてください」と頼むのは恥ずかしい。

ガソリンスタンドを横目に見て、うちまではもつだろうと考えた判断は甘く、航空技研の裏道にさしかかった時に、我慢は限界にきていた。

往診先で飲んだ甘酒が、誤算だった。

往診した患家で茶菓のもてなしを受けた時に、飲むのはよいが食べるのはいけないという心得がある。私は胃腸が弱く、間食をとらないのを習慣にしていたので、茶を飲むこともほとんどなかった。

しかし診察をおえ、盆にのせた洗面器で手を洗ったあと、

「遠い所をわざわざ来ていただいてすみません。私が作ったおいしい甘酒ですから」

と、くり返す老夫人の勧めを、むげに断るのも気がひけたし、私は甘酒が嫌いではなかった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「いっぱいちょうだいするか」
老夫人がしわの間の目を細めた。
「おじいちゃんもいかがです？」
「お相伴しよう」
寝返りをうってうつぶせに枕をかかえこんだ老人も、手のひらに湯のみを受けた。
老人の二人暮しの部屋にはそれなりの匂いがあり、十日余りにしろ寝たきりの病人には独得の体臭がある。石油ストーブがその匂いを強めている。
私は子供の頃から虚弱で、口に入れるもの手にするものについては母親からうるさく注意されていたので、飲食について神経質だった。しかし本来の性格にはのん気なところもあったのか、親もとを離れ成人するにつれて、不潔ということが人並み以上には気にならなくなった。
とくに医学部に入って解剖実習をし、インターンをおえた後で十年ほど病理の勉強をしてからは、不潔の観念が一変してしまった。
病理学教室では、癌にしろ伝染病にしろ、治療のかいなく亡くなった遺体を、死後間もない時間に解剖し、胃腸や骨髄の中までつぶさに手にしてしらべるのである。くさって溶けた癌組織、血のまじり合った膿、腸管をはみ出た糞便などをいとっていては病変が見きわめられない。解剖中には、膀胱を満たした尿が、最も透明で清潔な液体に思えることさえあった。
膿の中には生きた細菌がうようよいるし、血液にも感染力の強いウイルスなどが潜んでいる場合は少なくない。解剖執刀者は特攻隊ではないから、それらの感染から身を守る方法はつくす。予防のた

めに一応手は打つが、常識の目で汚ないと言っていては仕事にならないのである。
臨床に進んで生きた患者と接するようになってからも、同じことだった。病気を持ち病原体を排出する患者に近づかなければ、診療はできない。
湯のみの湯気の中に鼻を入れると、甘酒の淡い香りが心を和ませた。私が作った、と夫人が言うからには、インスタントではない。夫人の丹精がこめられているのだろう。
「本物は、やはりおいしいや」
と私がつぶやいた時に、うつぶせで飲んだ甘酒にむせたのか、老人が咳きこんだ。夫人が傍によって背をさすると、ようやく痰が出て咳が止んだ。
私は、湯のみの底に残った甘酒をすすりこんだ。
甘酒はうまいが、飲むと利尿作用があるのか、小便が近くなる。飲んでしまって戸口を出てから、私はそれを思い出した。
案の定、車を発進させて間もなく尿意をもよおした。たいしたことはないと高を括っているうちに、急速に思いは募り、ブレーキを踏む脚を曲げるのも苦しいほどになった。
航空技研の塀ぎわの道は、前を見ても後ろを振り返っても誰もいない。しかし車はいつ現れるかわからないし、狭い道幅を考えて裏門の空き地を選んだのである。万一、急に自転車にでも乗った人が近づいた時の体裁も考えて、茶の木の切れめを探したのだ。
ひと足先に、畑の畦が道に連なって、茶の木の欠けた所があった。
茶の列は腹の高さほどに刈りそろえてあるので、間に立てば目だたない。横から小便をかけると、

茶の木の八分目までが濡れた。

小春日和が続いて、乾いた道路の埃で茶の葉は覆われていたが、小便が洗い流すといきいきした緑に戻った。

湯気が立ちのぼって夕立ちの後のようである。葉蔭に白い茶の花がふくらんでいた。

気をつけて見ると、葉や枝の間にたくさんの蕾や花がある。咲いた花は、金色の雄蕊を包んで丸く花弁がふくらみ、濡れた葉の緑の間で日ざしを浴びている。

茶の花をのぞきこんでいた私は、不意に後ろから肩をたたかれた。振り向かなくても目の隅に、音もなく近づいてきて停った車が見えた。白と黒に塗り分けた車体はパトカーであった。

「立ち小便はいかんぞ」

と言うしわがれ声に聞き覚えがある。頭をまわすと、パトカーの窓から顔を出し、肩に手を伸ばしているのは警官の松山氏であった。

団地を挟んで南側に私の診療所があり、北にお寺を含む十軒余の集落がある。高みにある寺から集落の中の街道へ下りた角に駐在所があり、松山巡査はそこに住んでいる。

千余の世帯の入居する団地ができ、団地に接して気のきいた商店や飲食店が建ってからも、集落は以前と変らなかった。

団地の一角にはコンクリート製の交番ができて、時間によって、松山巡査の姿をみることもあったが、彼は元どおり駐在所に家族と共に住み、地もとの人々からは駐在さんと呼ばれた。夜になると入口の軒下には子供の頭ほどの赤電球がともり、暑い時などお寺への道を登ってゆくと、開け放した駐

在所の裏口から、ステテコ一枚で夕飯を食べている彼と家族の様子が見えた。
お寺へ往診に行く私が、
「今晩は」
と挨拶すると、
「坊主が病気か？」
と、しわがれた大きな声を出す。
往診にでかけた農家の縁側で、話しこんでいる松山巡査に会うこともあった。
「駐在さんが油を売っていていいのか」
と尋ねると、
「無駄話ではないぞ、住民調べだ」
と、縁に置いた黒表紙の厚い台帳を叩いてみせる。
私は松山氏と、顔みしりの間柄であった。立ち小便の最中に声をかけられてパトカーと知った私は、放尿を中断するほど驚いたが、声の主が松山氏とわかってからは気が楽になった。
「珍しいじゃない、パトカーに乗せられて。悪いことでもしたのか」
松山氏は後部席に坐っていた。運転席の若い警官が、振り返って松山氏の顔を見る。松山氏の眼鏡の奥の目は怒っているようだが、こけた頬がゆるみ、前歯がのぞいているのは、笑いをこらえているらしい。
「俺が悪いことなどするものか。本署へ応援に出向いたのだ」

「さては、本署が悪事をはたらいたんだな」
「ばかなことを言ってないで、いいかげんで小便をやめんか」
我慢を重ねてきた小便を途中で無理にやめるのは愉快なものではない。私は放尿を中止しないですむように話を続けた。
「松山さんまで出かけんじゃ、大事件でもあったのか？」
松山氏が体をのり出した。
「隣署の管轄するデパートの裏で、通り魔事件が発生してな」
もとは同じような武蔵野の村であった隣の市が、近年急速に発展し、数店のデパートも並ぶ繁華街ができた。女の三助のいる風呂やピンクキャバレーもあるそうで、犯罪が増えたらしい。
「殺人犯はつかまえたのか」
「殺しじゃねえ。買い物のかみさんがスカートを切られただけなんだが、肥満体で尻が大きかったので」
そこまで話した松山氏は、運転席の若い警官の後ろ頭に目を向けると、にわかに表情をひきしめた。
「いや、これ以上は教える訳にいかん」
「いいじゃないの、せっかく話し始めたものだ」
「職務上、知り得た秘密を口外してならんのは、医者の仕事も同じではないか」
助手席にかけた運転席のと同年輩の警官が、体をよじ向けて窓ごしに私の顔を眺めた。
松山氏の言う通りには違いないが、彼は一人の時はもっと口が軽い。とくに見ず知らずの隣市の人

の話で、実害のない場合は、自分の方から言い出すほど話好きなのである。しかし直属の部下ではないにしても、そばに若い同業者が二人もいるので建て前に従ったのであろう。

ようやく放尿をすませた私は、パトカーに向き直った。

「立ち小便が法律に違反するのは知っておるな」

「わかってはいても、我慢がならなかったのだよ」

「我慢ならんという理由で犯人を見のがしていては、逮捕する者がなくなってしまうではないか」

「小便で逮捕するの？」

「軽犯罪法だから、住所氏名を明かせばつかまえはしない」

「名前も家も知っているのに」

前を向いた運転席の警官が笑っているのか、制帽が小刻みに震えている。

「いちおう申告すれば後で沙汰がある」

「おどかすなよ」

「おどかしているのではない」

「かんべんしてよ、もうしませんから」

ジャンパーを引っ張って謝る私を、助手席の警官が見て言った。

「知り合いならいいじゃないですか」

「知り合いだとて法はまげられん」

むきになってみせる松山氏に、私は頭を下げた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com